

## お葬式が変わる

①

葬式用のひつぎに入ってみる「入棺体験会」を、神戸市北区の葬祭会館、ゆうあいホールが今年7月、地域の会員向けに催した。自分や家族が送られる場面を想像し、死を身近に感じてもらうのが目的だ。

集まった約15人が全員、白装束を着て、順番にひつぎの中に横たわる。ふたが閉じられ、周囲が手を合わせる。入る前に妙な面持ちだった人も、ふたが開いて起き上がる時は、穏やか

な笑顔になっていた。

2年前に夫を亡くした同区の青山貞子さん(76)は「ひつぎの中って静かで、心が安らぐものですね」と言い、「夫を思い、いずれ私も、と考えたら、死を恐れるより、毎日を前向きに生きようと思えた」と話す。

勧められて記者も入ってみた。中は暗くて怖いと想像していたが、木のひつぎは温かく、外にいる人の会話が柔らかく響いて、見守られる感じがした。不思議と気持ちが落ち着いて。

同ホールは5年前の開設時に地域交流の会「フィールクラブ」を設けた。葬式の利用は問わず、費用は原則、入会金5000円のみ。会員は1300人にのぼる。カラオケやゲーム大会、旅行などを月1回催しており、家族を亡くした悲しみや葬式の経験を語り合う中で、看護系学校などで行われている入棺体験会を初めて試みた。今後も続けた

## 入棺体験・相談サロンの試み

いという。

\*

「家族や周囲に迷惑をかけずコロッと逝きたいけれど、エンディングノートを書くのはつい先延ばしになって」。参加者の話に、尼僧の村井定心住職(54)が「何も書き残さずに突然亡くなるほうが、よけいに迷惑かもしれないかもしれませんよ」と突っ込むと、皆が苦笑いした。

京都市右京区の西寿寺は、2009年にNPO法人「自分で

考えるラストセレモニーの会」を発足させた。会員は約420人。年に5回、その人らしい葬式を考える勉強会を専門家を講師にして開き、毎回、全国から約30人が参加する。

家族らに伝えることを生前にしろすエンディングノートを教材に、「知っておくと得をする葬送のしきたり」「お墓や位牌をどうするか」「遺族の悲しみをいやすには」などをテーマに意見を交換している。

寺では、多様な形の葬式を望む人の相談に乗り、樹木の下に埋葬する自然葬、合葬、散骨などの希望にも応じている。

堺市北区の葬儀会社ワンハートセレモニーは「お葬式相談サロン」を設けている。生前から葬式の費用や方法、遺言などについて知りたい人が多く、月に約50件の相談がある。勉強会も開き、スタッフが自分が望む葬式を発表。「僕は釣りと酒が好きなので、酒をふるまい、遺骨は海に散骨してほしい」などとざっくばらんに語り、利用者の参考にもなっている。

\*



①入棺体験する参加者たち。白装束を着てひつぎに入った(ゆうあいホールで)  
②ミニ骨つぼに遺骨を入れて自宅にまつる「手元供養」の方法もワンハートセレモニーは案内している

現代の葬送を研究する小谷みどり・第一生命経済研究所主任研究員は「地縁が薄れ、核家族化が進んだ中で、葬式は家の慣習や地元のしきたりに従うのではなく、個人が自分で考え、つくるものになってきた」と強調する。そして「生前から葬式を考える機会を通じて、新たな人と人とのつながりが築かれていくことを期待したい」と話している。(満田育子)